

大庫を修葺せし時間内の舊藏二萬餘冊を發出せしに尙此書目と相印證するに足りしといふ。此書は四庫に收めず刻本罕なりしが今人月、陳清閣、持靜齋の兩鈔本を得て梓行せり。以て明代藏書の大略を見るべし。

以上四種は近刊適園叢書中に收む。〔有高〕

●清朝書畫譜 一大冊 文學博士 内藤虎次郎編

昨年我が京都帝國大學にて開設せられたる夏期講演に於て内藤博士が清朝史通論を講せし際、博士が參考材料に供せむ爲め諸方面より蒐集し嚴正なる鑒識の下に審査展觀したるものをコロタイプ版に附したるものなり。書畫共に清朝文化を代表せる一代の傑作、書は最近物故せし楊守敬、現存せる吳昌碩に至る迄五十七家。畫は所謂四王吳惲の六大家より閨秀をも加へて八十七家皆其の面目躍如たり、尙簡潔なる説明を附し清朝二百餘年の名家展べて百四十頁の中に在り。所謂文化史的方面研究の好資料なり (定價六圓五十錢 油谷博文堂發行) (那波)

●南宗衣鉢及跋尾 羅叔言輯述 長尾雨山譯

繪畫界空前の大著述なりと稱せらるる此の冊子は羅叔言氏が現今迄に存在せる支那畫の實物に就て流派を分ち系統を釋れて論述せるものの第一巻なり、即ち六朝一點、唐朝三點、五代八點、凡てコロタイプ精版にして、體裁は立幀と長卷とより成り、跋尾は別

に一冊となれり、是亦支那文化史研究の好材料なり、第二巻以下續々出版の豫定の由。(第壹卷 立幀十種一套、長卷二種、定價合計十七圓 油谷博文堂發行) (那波)

© Antoinette Guillard : Modern Germany and her historians. (London, 1915)

史學研究熱の旺盛史的思想の發達が實社會に及ぼせる影響勢力の最も顯著なる適例は、これを十九世紀に於ける獨逸統一事業に貢獻せる獨逸史家の勳功に求めざるべからざるなり。而して彼等史家の事業はかの一部人士の信するが如く、史學を或實際上の目的に隸屬せしめ單にこれが方便手段として活用せらるゝことにより始めてその實効を收め得べきのみとする鮮見を斥け、飽迄科學的、立脚地に據る所の獨立自由なる史學研究が實社會の時代潮流に寄與する感化力の決して鮮少なからざる實例を示すものといふべし。かのニール、ランケ以後の史學者の研究事業は實に這般の消息を示すものにして、是等歴史家と時代との密接なる關係を辿り、獨逸帝國思想發展の徑路を尋ぬるは極めて興味深き問題たるを失はず。本書は如上の近代獨逸と史學者との關係即ち獨逸史家が國民の實生活に史的思想を注入し帝國統一事業を喚起せしめたる所以を説述せるものなり。著者は先づ序論に於て十九世紀初頭に於けるプロシアの國民的思想勃興より説き起して、これと關聯せる

史學研究の發端を指示し爾後帝國統一の國民的熱望が對佛反抗の思想と相伴ひて、獨逸國民の氣勢を昂進せしむ行く間にありて、前後輩出せる史學の大家がこの氣運を體して、その筆に日に、過去の光榮ある國民の歴史を復活せしめて國粹的思想の發展に貢獻せし所多大なるを論じ、第一章 *Forerunners* に於てニーブル、及ランケを、第二章に於てテオドル・モムゼンを、第三章にハインリッヒ・フォン・ジイベルを第四章にトライチケを提へて、其人物、思想著述を論じ、これが國民社會に及ぼせる影響の甚大なりを示せり。而してニーブルがその羅馬史によりて自國民に佛革命に眩惑せる外國模倣の弊風を排し獨逸固有の國粹的特色を發揮すべきを説き、殊にプロシア國の改新的專制主義を以て獨逸國民に對する最良の政體なりとせる、ランケが其公正無偏の史眼を以てして猶プロシア王國の忠實なる謳歌者たりこと、モムゼンが羅馬史家たるに拘らず、其根本に於て熱心なる獨逸民族の讚美者にしてその羅馬史には獨逸族を擁護し誇稱する精神の滂湃せること、更にジイベル、トライチケに至りては實に獨逸帝國主義の權化といふべく、ジイベルの鼓吹せる國民的自由主義の政治思想、トライチケの宣傳せる權力主義國家至上主義がプロシア中心の新帝國創建及完成に寄與せる所を、本書中の各章に於て甚だ明快に且つ力強く説述せり。最後の結論に至りて著者は現代の獨逸

を觀察し、ワイリアム二世帝の主義政策を論じ、帝と史學及史家との關係に論及して、現時の帝國が國民の自由を抑制して極端なる武斷軍國主義を執り高尚なる德義文華を斥けて實利實益に趨り過大なる國民的浮誇驕傲に陷れるを指示し、かくの如き弊風はジイベル、トライチケ等の史家も其晩年に於て認めたる所にして、これは現帝と兩史家との衝突によりても知らるゝことなるを述べ、而も如上の趨勢は彼等史學者も翼賛助長せしプロシア本位の國民的統一思想、愛國的感情將た、國家至上、權力鼓吹の學說の *logical end* に過ぎざるものにして、かくる惡むべき主義政策の宣傳者たりし最近のプロシア史家は將にその齎と來る結果に對し當然の責任をわかつたべからずと論結せり。〔植村〕

● **Wilhelm Rittinghaus** : Die Kunst der Geschichtschreibung Heinrich von Treitschkes. (Leipzig, 1914)

本書はクムメンコト氏の主筆とし *Beiträge zur Kultur- und Universalgeschichte* の第二十九篇として現れたるものにして、トライチケの歴史編述法を論ぜる好著なり。其内容を觀るに、先づトライチケの歴史著述の *Persönlichen Voraussetzungen* としてトライチケの人格及彼の政治、史學に對する觀念を論じ、國家即權

力説、歴史は國民自保の爲の戰闘なること、歴史に於ける個性の力を重視し *Manner machen Geschichte* を主張すること、歴史法則に對する彼の超絶的見解等を指示せり。次に彼が著作上の發展徑路及その全著述中に於ける「獨逸史」の位置に及びて初期に於ける詩的著作 *Essay* 並びに *Politische Pamphlet* に現れたる「トライチケ」を説き、最後に彼が畢世の大著「獨逸史」の性質を論じ、該著起稿の動機は全く獨逸國民を覺醒し教導する目的より出でしものにして、その取扱へる十九世紀前半の歴史時期は決して彼に興味を惹起せしめしものにあらず、彼が *Gustav Freytag* に與へし書中、「

„Wusste ich nicht so gewiss, dass die Geschichte des Deutschen Bundes geschrieben werden muss und grossen Nutzen stiften kann ; ich wähle jede andere Arbeit lieber als diese, die aller Grösse, alles ästhetischen Reizes bar ist“

と云へるはよく彼が該著述に對する感想を表せるものにして、壯大なる目的を以て書かれし「獨逸史」は實に彼が最後に大成を期せし自家の本領たる政治論に關する著作の豫備的基礎たりしことを説けり。それより「獨逸史」の記述法を論じ、彼の記述は *objectiven* *tailen* にあらずして *schaffen* なり、穩當に事實を判定す

るにあらずして自家一流の見解確信を以て事實を處理するなりとし、彼の記述中に現れたる *Gegensatz, negativ, Qualität, Konsolation* に對する *Einführung* の妙用を實例によりて指示し、次に *Massenhygiene, Aufbau der Stimmung, kleinere Mittel der Darstellung* の各節に亘りて彼の記述法に就いて精緻なる内面的心理的研究を發表し、最後に獨逸史の *Gesamteindruck* を述べて、その記述は強烈なる感情を讀者に與へ、變幻漉りなき表現に酔はしむるも、一貫せる事象の發展を把握せしめ難く、著者の人格、著者の精神を發露すれども、眞實なる過去の再現を求め得ず、吾人は歴史記述として更に事象の因果關係を嚴く探求し卒直實實に *erzählen* するを理想とせよと云ふからざる論結なり(「植村」)

⑤ *Ch. B. Coleman* : *Constantine the Great and christianity. (Studies in History, Economics and Public Law. Vol. LX No. 1) Columbia Univ. Press, 1914*

コンスタンチン大帝の事蹟が古代期末の歴史舞臺に重大なる位置を占むるは云ふ迄もなく、その後代の政治及文化の上に及ぼしたる影響亦甚だ深きを以て、大帝に關する史的論著は各方面に亘りて殆ど枚舉に遑あらず、その研究論議彌盛なりとす。殊に大帝と基督教との關係、即ち大帝の信仰、その宗教政策は文化史上に於

ける意義最も重大なる問題にして、而もその真相を闡明すること至難なるを以て、幾多の羅馬史家文化史家宗教史家の間に異論最も多き所なり。Gibbon, Niebuhr, Burchardt を始め Bury, H. Schiller & Keim, Zahn, Briger, Seeck, Schwartz 等の論證續出して決する所を知らず。本書はこの問題に對する著者の精緻なる研究を公にせるものにして、基督教史上の大帝を史實上、傳説上、僞作上の三方面に分ちて論述したり。第一部史實上のコンスタンチン、基督教に於ては、法典泉貨刻銘記錄の根本史料よりして、大帝の基督教底義、異教に對する態度、大帝改宗の時機、その信仰及洗禮等の問題を解明し舊來の諸説を判じて、その歸着する所を示せり。著者は是迄大帝の基督教擁護の動機が政略的なりしや宗教的なりしやの問題を解決するに熱中したりしを排し、如斯動機論よりも實際の態度政策、一般に及ぼせる影響を論ずることの遙に重要なるを主張し、この見解よりして大帝が當初より基督教に好意を有し、該信徒底護の政策を執り、三三三年以前に於て既に基督教を國教と同等の位置に立たしめ、爾後異教を斥けて專意基督教信仰の態度政策を示し、其個人的生活に於ても明かに信教の實を現はし居りしを説き、大體に於て O. Seeck 氏の説に賛意を表し居れり。(Geschichte des Untergangs der antiken Welt. 參照) 第二部傳説上のコンスタンチンと基督教に於て、著

者は傳説に現れたる大帝の性行が、史實上四世紀に於ける歐洲人の基督教化てふ文化的革命に際せる大帝の事業に比して、あながち劣らざる影響感化を後代に及ぼせるを説き、斯の如き傳説の起原と其の一般に信憑せられ行く徑路とを明かにして、當代の知識界思想界の真相を測知せしめんとせり。大帝の傳説はかのアレキサンダー大王のその如く、神秘不可思議の語説に富み、蒙昧なる中世の人心を支配せる力は決して看過すべきにあらず、その事柄は架空虛構の語説なれども、これを容認せる時代の思想の一部を形成せるものとて、史的研究の價值充分なりと云ふべし。氏は大帝の祖先生母に關する傳説、改宗洗禮に關する奇蹟等に就て數章に亘りその來歴を説述せり。第三部僞作上のコンスタンチンに於てはかの中世の法皇對皇帝問題中に於て重要なコンスタンチン大帝の寄進文書(Constitutum Constantini)の僞作に就ての考説を述べたり。氏は先づ該文書の内容を挙げ、次にこれが Deu-do-leidorean Decretals 中に載せられて公にされ一般に認容せられ利用せられし事情を説き、而もかの Hodgkin 氏等の如くコンスタンチン寄進狀の説話は即ち中世の歴史を物語るものなりと迄これを重大視する見解を斥けたり。これより氏は該文書僞作發見の歴史を説き Cusanus, Valla 等の有名な論文を紹介し、更に近世以來に於けるこの僞文書に關する考説より現代

に於ける偽作の起原由來に就ての科學的批判を擧げて論述を了れり。尙附録として *Myerwer* 傳コンスタンチン改宗の一節、コンスタンチン寄進文書 *Chrysostomus* の寄進文書批判文を添へ且つ詳細なる史料及參考書目を附したり。本書は全體に於て別段獨創的見解として將た嶄新なる所説として認むべきもの鮮しと雖も、コンスタンチン大帝と基督教との關係に就て廣く史料に涉りこれを吟味批判し從來各方面より提出せられたる諸論議を參考して穩健なる論斷を下したるを、歴史事實上に於ける大帝の事蹟と並べて、これと同様に着實なる態度を以て傳説上偽作上に於ける大帝の幻影を研究せることは注目し値すべき點なるべし。〔植村〕

●日本遺蹟、遺物、圖譜 第一輯、第二輯

本圖譜は本邦各地に散在せる石器時代・古墳時代の遺蹟及び其遺物を調査研究せんとする者の參考に資し、兼て遺蹟の實際を圖にあらはして永く傳ふる目的を以て、去る四月より毎月一回遺蹟、遺物研究會より刊行するもの、編輯者は此の方面の實際に通ぜる和田千吉氏なり、圖版は縦一尺五寸横一尺五分の大版にて一輯コロタイプ版六葉解説一葉より成り、時にはコロタイプに代ふるに本版色刷二三を以てする事ありと云ふ。今既刊の分を見るに、第一輯には陸前國、宮戸島里、濱貝塚、發掘遺物、越前國、新横江村、發掘の銅鐸、其の遺蹟、豐後國、大分市、宇龜甲の古墳、及び下野國、横川村、大

字江、曾島、發掘の櫛を收め、第二輯には宮戸島里、濱貝塚の遺物、豐後大分市、宇龜甲の發見遺物、筑後國、千年村、大字、徳丸、發掘の銅劍、筑前國、周船寺村、丸隈山、古墳の石棺、羽前國、大山町、宇火、打崎、發掘の石棺、上野國、清里村、宇道上、發掘の遺物を掲げたり。

此の圖譜の特色とする所は從來の多くの考古圖類が單に其の物の一面を示すに過ぎざるに反し、左右側等各方面よりこれを示し、又其の遺物を發見せる遺蹟を併せ收めて一遺蹟の内容外形に亘る凡てを網羅せんとせる點にあり。此の方針を以て綴々刊行されたらんには從來考古學研究上の缺陷を補ふ事少なからざるべし。其の圖版稍大に失し取扱に不便を感じる如きも、これ亦遺物を多く實大に示すの便あらん。たゞ解説に多少文意の通ぜざる所等あるは今後の改訂を望まざるを得ず。〔梅原〕

●奈良縣、史蹟、地調查會報告書 第三回

此の書は奈良縣史蹟勝地調查會の大正四年度の報告書にして、其の年間に各委員が實査せる各種の遺蹟の研究結果を收めたるもの本。別の二冊より成る。本冊は本文八十六頁、附録六頁、圖版八十七葉にして、天沼・水木・佐藤・高橋・新納・大宮・西崎各委員の寺址・石燈・石塔・石佛・古墳に關する報告を載す。中に就て天沼委員の報告は寺址・石燈・石塔・石佛・古墳に亘り十五種の遺物遺蹟の詳細なる記述あり、本文二十頁、圖版四十一葉、本書の主